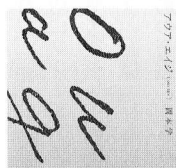


「アウア・エイジ」(Our Age)

岡本学

鉄塔の幸福 阿部公彦



著者 阿部公彦
発行 1947年10月
発行所 講談社
紙装
1400円+税

講談社 1400円+税

『アウア・エイジ』の主人公は数学に詳しく、現在は小さな大学で教えている。これだけでも察しがつく人もいるかもしれないが、物語はミステリー仕立てになっており、「私」が勘とロジックを駆使し、偶然にも助けられながら美しく謎を解くという展開になっている。ただ、謎解きの果てに明かされるテーマは意外にも明るく、そこにこそ、この作品の、そしておそらくはこの作家の魅力があるように私は思った。

冒頭、「私」の元に奇妙な招待状が届く。「映写機の葬式」をするのだという。発送元は大学院生の頃に映写技師のアルバイトをしていた神楽坂の映画館だった。記憶が呼び覚まされる。中心に立ち現れるのは、ミスミという女だった。これまで封印してきた謎があらためてよみがえる。どことなくノワールな、

それでいて甘酸っぱい青春の匂いも混じらせたミステリーがこうして始まる。

しかし、注意すべきは、この主人公が、中年期虚脱症のようなものに見舞われていることである。そのこともあり冒頭部ではメランコリックな空気が作品世界を覆っているが、謎が謎を呼ぶうちに次第に理知的な緊張が張り巡らされ、つりこまれるように主人公は（そして読者も）そのミステリアスな連鎖を追いかける。すると、霧が晴れるようにメランコリックな停滞に温度が通い、向こう側にあるものが見えてくるという仕掛けだ。そう。この小説のミステリーはノワール臭を漂わせつつも、どこかセラピーのような構造をも持っていて、陰鬱な気分の中から回復の種を浮かび上がらせるのである。

物語のカギを握るのは一枚の写真だ。二十

女性がらみの妄想を見る人もいるかもしれない。しかし、すでに触れたように、この作品の持ち味は、こうした耽溺を振り払うところにこそある。途中から物語は、理知性とスピリド感とともに展開する。そこで意味を持つのが、数学専攻の「私」がかつてとりこんでいたというカントール集合をめぐる研究だった。中身の形式だけの抜け殻に思えるカントール集合体同士をぶつけると、新しいつながりが生まれるとの仮説がある。この仮説を地で行くかのように、点と点とが思いがけない線を生みながら物語が連鎖するのだ。

そのうちにミスミは後景に退き、母親の物語が立ち上がってくる。「映写機の葬式」の帰り、「私」はかつてミスミが住んでいたアパートを訪れる。かつてストーリーカー気味にミスミを追いかけたことがあったので、家は知っていた。そこで彼はミスミのことを知る大家の老妻と会う。彼女の母親はお茶の水女子大で数学を専攻し、数学の教師をしていたらしい。すでに夫はいなかった。出身はどうやら千葉方面だという。野心が強く、自己顕示欲もあったが、気まぐれで酒癖が悪く、ミスミとそっくりの奇癖もあった。コーヒーでガラガラというがいをするのだ。

このあたりまでくると『アウア・エイジ』

は、冒頭部のミステリアスな憂愁とは打って変わり土の匂いをまじらせた、人間関係のほつれやごごりのようなものが目につき始める。まるで神楽坂のアパートを舞台に、昭和の演歌の響きと呼び込まれるかのように。

その後、「私」はまったくの偶然からこの母親の故郷に立ち寄ることになり、さらなる情報を得る。母親には男関係があった。そのため医学博士だった夫との結婚が破綻、あおりで実家の醤油屋も廃業に追い込まれたという。しかし、ミスミの父親と思われるその肝心の警官は早々に死亡、母親はひとり東京に出た。さらに、これも偶然立ち寄った松山の伊丹十三記念館でのことだが、「タンポポ」の有名な一場面を見て、ミスミの「お母さん泣きながら食べてたなあ」といった言葉の意味を「私」が悟ることになる。ここでも、まったく無関係に思えた点がつながっていく。

クライマックスに用意されているのは、冒頭の写真の鉄塔だ。緻密な論理と情報とを駆使しながら、「私」は少しずつ鉄塔の真実に迫る。無機的で、機能だけのためにあるような鉄の塊。しかし、どんな塔にも喚起力がある。性的なものとは限らない。衆人の注目を集めながら天空を志向し、記憶の彼方にベクトルを向けるようなその不思議な引力には、

年ぶりに映画館を訪れた私は、館にゆかりの人たちで賑わう会場の壁に、その写真をみつけた。鉄塔が写っている。映画館で受付けをしていたミスミは、「いかに殺されそうな女」というイメージとともに記憶されていた。身なりに構わず、奇妙な癖やこだわりがある一方、性関係はわりゆるく、多くの男と関係を持っていたらしい。奥手の「私」でさえ関係を夢想したが、こちらは未遂に終わる。ミスミは他人と穏やかで距離を保った交流をとることができないのだ。過剰な自意識にさいなまれ、自分の内に抱えたものをこちらにぶつけてくる。背後には母子家庭での、母親との難しい関係があったらしい。彼女はその後、ほんとうに交際相手に殺されてしまう。

過去に知っていた不幸な「不思議女子」を懐かしむ主人公の姿に、中年男にありがちな

人類創生以来の夢が託されているようにも思える。『アウア・エイジ』の鉄塔も奇妙であり、美しい魅力を放つ。

この作品の鉄塔は実在する。その実像を確認してみたい衝動をおさえられず、私は作中の情報をたよりに検索をかけ、画像を見ることができた。たしかになかなかのものだ。この鉄塔に向けて書かれる小説があることは十分に理解できる。ミスミが鉄塔の写真を貼るといふくだりを含め、ミスミをめぐるどこか芝居があったメランコリックな気分は、この作品の後半で突きつけられる泥臭い現実臭と見事に釣り合うが、その釣り合いの支点となるのがこの鉄塔なのである。

小説の最後、謎だった写真の鉄塔の所在がいに明らかになる。鉄塔を訪れた「私」は、母親がミスミに何をしようとしたか、しかし、ふとしたきっかけでそれがかわらず、その結果、母親がまったく新しい境地に達したことを知った。そして、写真に書きつけられていたと思われた *Our Age* という二語が、実は *Booth* という一語だったということも判明。ここへ至って「私」は、ミスミの母からミスミをへて自分へと重要な使命を受け継がれたことを確信することになる。実に明るい結末なので。